

Departmental Bulletin Paper / 紀要論文

# 意識システムの自己言及的作動と意味世界の産出

Self-referential Operation of the Psychic System and  
Production of the Meaningfull World

村上, 直樹  
MURAKAMI, Naoki

人文論叢：三重大学人文学部文化学科研究紀要. 2000, 17, p. 101-121.

<http://hdl.handle.net/10076/5299>

## 意識システムの自己言及的作動と意味世界の産出

村上直樹

**要旨** 本稿は、意識システムの産出作動に関して、次の二つの点を指摘する。1) 意識システムは、自身の自己言及的な産出作動によって、その構成素の間に時間的な前後関係を形成しており、その結果、連続性を持った知覚的立ち現われの展開が可能になっている。すなわち、意識システムの自己言及的作動は、統覚のような働きを果たしている。2) 意識システムが産出する知覚世界はその当初から言語と織り合わされており、そのことによって意味世界として構成されている。また、知覚世界が言語と織り合わされるのを可能にしているのも、意識システムの自己言及的作動である。

### はじめに

マトゥラーナとヴァレラによって神経生理学の分野で構想されたオートポイエーシス・システムの理論は、その後、ニクラス・ルーマンの手によって、一般システム理論へと展開されていった。その適用範囲は広範で、人文社会科学では社会学、経済学、法学、科学史、文学理論などの分野でオートポイエーシス論に依拠したシステム論的研究が進められている。また、オートポイエーシス論は、人間の心的活動にも適用が試みられており、ルーマン、ブランケンブルク、河本英夫、花村誠一らが意識システムに関する理論を展開してきた。我々は、この意識システム論の可能性に注目し、彼らとは異なるスタンスと観点から我々自身の意識システム論を構築する作業をこれまで行ってきた。その一応の成果は、二つの論文（村上（直）1997；1999）にまとめてある。ただし、これらの論文で呈示してきた意識システム論の枠組みはいまだ端緒的なものであり、つけ加えるべき論点も数多い。そこで、本論文では、意識システムの産出作動に関して新たな説明をつけ加えることによって、これまでに呈示してきた理論的枠組みを補完する作業を行いたい<sup>(1)</sup>。

以下が本論文の構成である。まず1では、カントの認識論における統覚とはどのような働きであるのかを確認した上で、意識システムの自己言及的作動がその統覚のような働きを担っていることを指摘する。また、意識システムの自己言及的作動の統覚的な働きがカントの言う統覚とどのように異なっているのかも併せて指摘する。2では、意識システムが産出する知覚世界が意味世界として立ち現われることを最初に確認し、次に知覚世界が意味世界として立ち現われるということはどのようなことなのかを説明する。そして、カントとフッサールの意味付与論が知覚世界の意味的立ち現われに関する説明としては有効ではないことを示した上で、知覚世界と言語の関係に着目しつつ、どのようにして知覚世界が意味世界として構成されているのかを詳述する。

## 1. 意識システムの自己言及的作動と統覚

オートポイエーシス論では、自分自身の状態と相互作用できるシステム、あるいは、すでに産出された構成素と相互作用しながら産出プロセスが進行して新たな構成素を産出し、すでに産出されたすべての構成素が新たな構成素の産出に関与するようなシステムを自己言及システムと呼ぶ（河本1995：170）。立ち現われを構成素とする意識システムはこのような意味での自己言及システムである（村上（直）1997：37）。意識システムは自己言及的作動を行う。そして、この自己言及的作動は、意識システムにおいて様々な働きを担っている。まず、第一に、自己言及的作動は、カントの認識論における統覚のような働きを果たしている。それ以外の重要な働きについては、後に述べることにして、本章では、この自己言及的作動の統覚的な働きについて説明したい。最初に、カントの認識論における統覚とはどのようなものであるのかを確認しておこう。

### (1) 表象の統一と時間的秩序の構成

周知のように、カントは、人間の認識は感性と悟性という二つの能力から生じると考えた。感性とは、対象から何らかの仕方で触発されて表象を受け取る能力（受容性）であり、悟性とは、感性によって与えられた多様な表象（認識の質料）を思惟する能力である。人間の認識は、この両者が結合してのみ生じ得る（Kant1787=1961a：124）。ただし、正確には、悟性が直接関わるのは、「一切の思惟よりも前に与えられ得るところの表象」たる直観（Kant1787=1961a：176）ではない。「悟性はまず直観の対象に関係する——と言うよりは、むしろ構想力による対象の総合に関係する」（Kant1787=1961b：43）のである。構想力とは、感性によって与えられた多様な表象＝直観を悟性に媒介する作用である。構想力とは、総合する作用であり、総合とは、「多様なものをまず或る仕方で通観し、これを取りまとめ、更にまたこれを結合して、この多様なものから認識を構成しようとする」作用である（Kant1787=1961a：150）。ただ、総合するといっても、対象となる表象には、すでに消えてしまった表象も含まれる。構想力は、「今ここ」の表象だけではなく、現に存在していない表象をも総合する。構想力がそのような総合を行うことが可能なのは、構想力が、「対象が現在して〔現に存在して〕いなくてもこの対象を直観において〔即ち直観的に〕表象する能力」（Kant1787=1961a：193）だからである。そして、構想力によって総合された表象にさらに統一を与えるのが悟性である。構想力による多様な表象の総合だけでは、まだ認識は得られない（Kant1787=1961a：151）。構想力によってもたらされた多様な表象の総合に、悟性が統一をもたらすことによって認識が成立するのである。

それでは、悟性はどのようにして表象の総合を統一するのであろうか。悟性は、自らの内に純粹悟性概念すなわちカテゴリーを含んでおり、このカテゴリーによってのみ、直観における多様なものについて何かあることを理解することができる、換言すれば直観の対象を思惟することができる（Kant1787=1961a：153）。そして、悟性がカテゴリーによって思惟するということは、悟性が多様な表象（あるいは構想力によって総合された多様な表象）を結合しそれに秩序を与えるということ、つまりはそれを統一するということである。現象における結合関係あるいは秩序は、現象の内に存するのではなく、まったく悟性のなすわざなのである（Kant1787=1961a：177）。

さて、悟性は純粹悟性概念＝カテゴリーを介して、(綜合された)多様な表象に統一を与えるわけであるが、この純粹悟性概念＝カテゴリーとは一体何なのだろうか。カント自身の表現によれば、それは、「思考形式」(Kant1787=1961a:190)である。カテゴリーは概念といっても日常的な意味での概念ではない。それは、思惟の様式、あるいは対象を判断し把握する様式のことである。思惟する能力としての悟性とは、いわば判断し把握する能力のことであり(Kant1787=1961a:142)、悟性が多様な表象を判断し把握する際の様式がカテゴリーなのである。悟性は、計十二のカテゴリーを備えており、対象に応じて、それらの内のいくつかを組み合わせて判断を行い、多様な表象に統一をもたらす。そして、その結果、ある認識が成立するのである。具体例で言えば、屋根や壁や窓などの多様な感性的表象を、悟性が「量」や「質」のカテゴリーに従って統一するとき、一定の広がりを持った家全体の認識が成立するのである(種村1986:88)。なお、さらに日常的ないわゆる「家」という認識が成立するには、「家」という経験的概念による経験的統一が必要であるが、カントは、かかる経験的統一を『純粹理性批判』では「考慮に入れない」と述べている(Kant1787=1961a:183)。(経験的統一に関しては、次章でよりくわしく言及する。)

ここで、以上の要約をふまえて統覚とはどのような働きであるのかをとりあえず記しておこう。統覚とは、構想力による綜合の助けを得た悟性が、あるいは悟性と構想力の双方が、感性によって受け取られた脈絡のない多様な表象を一定のまとまりへと総合的に統一することによって現象(世界)を構成していく働き、ないしは現象の認識をもたらしていく働きのことである。

ただ付言すれば、カントの言う統覚は、現象の認識をもたらすだけのものではない。それは、自己の統一ももたらす。カントの認識論の主要な関心は疑う余地もなく外的対象の構成に向けられており、『純粹理性批判』において認識とは主として外的対象の認識を意味するが(中島1987:114)、カントの言う統覚は、外的対象を構成するだけでなく自己を統一する働きでもある。「統覚は、諸々の知覚(表象内容)の統一であると同時に、そのような多様を自己中に包み込んだ、自己自身の統一である。すなわち、統一的知覚であると同時に統一的自覚である、すなわち、他者統一であると同時に自己統一である」(有福1990:68)。本稿で我々がもっぱら問題にするのは、統一的知覚としての統覚の方であるが、統一的自覚としての統覚に関してもいづれ別稿で論及することになるだろう。

ところで、外的対象を認識するという事は、何ものかを客観的な(すなわち因果的・時間的に必然的な)先後系列へと秩序づけるということでもある(中島1987:114-115)。脈絡のない多様な表象を総合的に統一するという事は、それらに、時間的な秩序を与えるということなのである。このことに関して、カントは次のように述べている。

およそ経験を成立せしめ、また経験を可能ならしめるためには、悟性を必要とする。そのために悟性がなすべき第一のことは、個々の対象の表象を判明にすることではなくて、対象一般の表象を可能にすることである。ところでこのことは、悟性が時間秩序を現象とその現実的存在とに適用することによってなされる。つまり悟性は、結果としての現象に、先行の現象に応じてア・プリアオリに時間において規定された位置を与えるわけである。(Kant1787=1961a:275-276)

また、これもカントによれば、「知覚だけによるのでは、一つの現象を他のどんな現象から

も、時間関係の上から区別せられない」(Kant1787=1961a : 271)。すなわち、感性によって受け取られただけの多様な表象の間には、いかなる時間関係もないのである。感性によって受け取られただけでは、二つの表象が相次いで継起するということではなく、ただ、一つの表象が他の表象に置き換わって生起するだけなのである(Kant1787=1961a : 271)。そこには、「表象の戯れ」(Kant1787=1961a : 271)があるだけである。これでは、「或る出来事が知覚される場合に、この出来事はそれに先立つ何か或るものに関係せしめられる」(Kant1783=1977 : 96)という事態は起こり得ない。

表象がそれに先行する表象と関係を持ちつつ次々と継起していくのは、統覚の働きによる。ただ、統覚の働きといっても、「統覚における構想力の総合」(Kant1787=1961a : 287)だけでは、多様な表象に客観的な時間関係を与えることはできない。カントによれば、構想力は、時間上における二つの知覚を結びつけることができる。しかし、「構想力においては（何が先行し、何がこれに継起せねばならぬかという）秩序に関しては、まったく規定されていない」(Kant1787=1961a : 277)。例えば、河を下る船を見ている場合、より上流にある船の位置の知覚をA、より下流にある船の位置の知覚をBとすると、AがBについて継起するといったことはあり得ないが、単なる構想力による総合においては、AからBへといった結合もBからAへといった結合もあり得るのである。構想力は、「一つの状態が時間的に他の状態よりも前にあるようにも結合できるし、またそのあとにくるように結合することもできるのである」(Kant1787=1961a : 265)。

結局、多様な表象を客観的な先後系列へと秩序づけるのは悟性であるが、そこには、物自体からの触発が決定的に関与している。物自体からの触発が、客観的な先後系列の端緒を形作るのである。すなわち、悟性は、時間秩序を現象とその現実的存在とに適用するが、その過程は、実は、物自体が私を触発することによって、物質に内在する動力学的秩序A→Bが、カテゴリー・時間的秩序A→Bへと転化する過程なのである(中島1987 : 120)。

さて、以上に述べてきたように、統覚とは、感性によって与えられた多様な表象＝直観に時間的な秩序を与えるということでもある。統覚の作用は、脈絡のない多様な表象を一定のまとまりへと総合的に統一していくわけであるが、そのためには、まず、時間的な前後関係が成立しなければならない。単にある表象Aに置き換わって他の表象Bが生起するだけであるのならば、つまり、Bが時間的にAの後のものとして継起するのでないのならば、AとBとの間に連続的な関係は作られず、AとBを一定のまとまりへと統一することは不可能だろう。具体例を挙げると、例えば、ボールがあたって窓ガラスが割れるという事態において、もし、窓ガラスに向かって飛んでいくボールと粉々にくだけちる窓ガラスの間に時間的な前後関係が成立しないならば、ボールがあたって窓ガラスが割れるという因果的な出来事は構成されないだろう。粉々にくだけちる窓ガラスが窓ガラスに向かって飛んでいくボールの後のものとして継起しないのならば、そもそも両者の間に連続的な関係が作られず、両者を因果性の概念で把握することもできないのである。そして、このようなことは、因果的な出来事以外の例でもあてはまる。例えば、屋根や壁や窓といった家屋の諸部分を次々と見るという事態において、もしそれらの間に時間的な前後関係が成立しないならば、それらの間に連続的な関係は作られず、家全体の認識は成立しないだろう。

多様な表象を一定のまとまりへと総合的に統一していく働きである統覚とは、まずもって多様な表象に時間的な前後関係を付与しそれらの間に連続的な関係を形成していく作用なのである。

## (2) 意識システムの自己言及的作動と知覚的立ち現われの連続性

野家啓一は、大森荘蔵との対談の中で、「立ち現われというものは当然にも時間的に推移していくわけですが、その立ち現われの時間的展開を統一するものとして、どうしても統覚我みたいなものがなければ収まらないという場面が出てくる」(大森・野家1986:38)という発言をしている。確かに、知覚的立ち現われの推移が、もともとは時間的な前後関係を持たない知覚的立ち現われの交代のプロセスであるとするならば、連続性を持った実際の知覚的立ち現われの展開が可能になっているのは、カントの言うような統覚の作用が働いているからだということになるのかもしれない。しかし、我々は、知覚的立ち現われを産出する意識システムの産出作動の外にそのようなある種の主観性の働きがあるとは考えない。我々は、意識システムの自己言及的作動が統覚的な働きを果たしているのだと考える。

意識システムが、ある知覚的立ち現われBを産出するとき、その知覚的立ち現われBは、すでに産出された知覚的立ち現われAと相互作用する形で産出される。すなわち意識システムは知覚的立ち現われを自己言及的に産出する。そして、BがAと相互作用する形で産出されるということのもっとも基本的な側面として、BがAの後に続くものとして産出されることがあるのである。知覚的立ち現われの推移は、時間的な前後関係を持たない知覚的立ち現われの交代のプロセスではない。意識システムは、自身の作動それ自体によって、知覚的立ち現われの間に時間的な前後関係を形成している。そして、そのことによって、連続性を持った知覚的立ち現われの展開を可能にしているのである。

もし、意識システムが自己言及的な作動を行わないならば、知覚的立ち現われの推移は連続性を欠いた脈絡のないものになるだろう。立ち現われる事象は、それ以前に立ち現われた事象とまったく無関係に立ち現われるわけであるから、立ち現われるすべての事象は先行者を持たない初源の事象として立ち現われることになる。すべてが初源である。比喩的に言うならば、そこに時間は流れていない。今、今、今……があるだけである。このような事態を、通常の人間の経験である時間的前後関係を持った連続的な知覚的立ち現われの推移に転化するには、カントの言う統覚の作用が必要であろう。しかし、実際には、意識システムは、自己言及的な産出作動を行っており、知覚的立ち現われの推移はもともと連続性を持っているのである。

ここまで述べてきたように、意識システムの自己言及的作動は、統覚のような働きを果たしている。ただ、自己言及的作動による時間的な連続性の形成とカントの言う統覚による時間的な連続性の形成の間には、大きな違いがある。大澤真幸らの指摘によれば、統覚とは、知覚の推移を振り返り、それらが統一的な全体に所属することを確認し、それらの間に統一性を与えるべくそれらに反省的な修正をほどこすことである(大澤1995:18)。つまり、脈絡のない多様な表象が与えられてからそれらの表象の間に時間的な前後関係が付与され連続的な表象の継起が可能になるまでには、時間的な遅延があるのである。カント的な心意識においては、与えられた表象を一定の遅延の後に振り返るまでは、表象間の連続的な関係は作られない。これに対して、意識システムの自己言及的作動による時間的な連続性の形成には、そのような遅延は存在しない。意識システムは、すでに産出された知覚的立ち現われに後続するものとして新たな知覚的立ち現われを産出する。意識システムが知覚的立ち現われを自己言及的に次々と産出することそれ自体によって、知覚的立ち現われの間に連続的な関係が形成されるのである。

なお、河本英夫は、心的システムの自己言及的作動によって時間という次元が形成されるという指摘を行っている。河本によれば、「思考の思考への関わりという自己言及性は、双方の

思考を前―後関係へと差異化することによって、時間という次元を獲得していく」（河本1994：237）。システムの自己言及的作動が、「思考」という構成素に時間的な秩序を与えるのである。そして、河本のこの指摘もシステムの自己言及的作動が、構成素の間に時間的な連続関係をもたらすという統覚的な働きを持っていることの指摘とみなすことができるだろう。また、河本は、「思考」相互の間の前―後関係に再度再帰的な相互作用がなされると前―後を通底する共通の軸がシステムの産出作動を通して獲得され、この共通の軸だけを取り出すところに時間意識が生まれるという説明も行っているが（河本1995：279）、時間意識に関しては、後期ハイデガーの時間論を取り込んだ上であらためて論じることにはしたい。

さて、本章では、統覚が、まずもって多様な表象に時間的な前後関係を付与し、それらの中に連続的な関係を形成していく作用であることを確認した上で、意識システムの自己言及的作動がそのような働きを持っていることを指摘した。次章では、知覚世界が意味世界として立ち現われるにあたって自己言及的作動が重要な役割を担っていることを示すことになるだろう。

## 2. 意味世界としての知覚世界

意識システムが間断なく産出し続ける知覚的立ち現われの世界は、現象学の言う生活世界＝「それだけがただ一つの世界であり、現実の知覚によって与えられ、そのつど経験され、また経験されうる世界であるところの生活世界」（Husserl1954＝1995：89）に相当する。この知覚世界＝生活世界は、「色のついた様々な場所や脈絡のない雑音や寒暖の中心といったものの単なる寄せ集めではないし、またそうであったことはかつて一度もない」（Schutz1973＝1985：11）。知覚世界は、意味を持たない色や形や音の単なる集積ではない。知覚世界は、常にすでに意味を孕んで立ち現われる。例えば、「われわれの耳に「さしあたり」入ってくるものは、決してただの雑音や複合音ではなくて、きしむ荷車やオートバイである。聞こえてくるのは、行進中の縦隊や、北風や、幹をたたきつつきや、ぱちぱちはぜる火である」（Heidegger1927＝1994：350）。知覚世界は、その当初から意味世界として産出されている。では、知覚世界はどのようにして意味世界として構成されているのだろうか。それに答えるのが本章の課題である。まず最初に、知覚世界が意味世界として立ち現われるということはどのようなことなのかをもう少し説明しておこう。

### (1) 「として」構造とカテゴリーカルな立ち現われ

知覚世界は、形象的・色彩的・音響的にきわめて詳細にそして重層的に分節されている。知覚世界は、それ以外を「地」とする無数の「図」（視覚的な「図」に限らない）を持っているわけである。そして、この「図」は、必ず「何かあるものとして」立ち現われる。知覚世界が意味世界として立ち現われる、ないしは産出されるということは、知覚世界に内属する無数の「図」が必ず「何かあるものとして」立ち現われるということである。この「あるものがあるものとして etwas als etwas」立ち現われるという「として」構造 als-Struktur（Heidegger 1927＝1994：322）が、意味世界としての知覚世界の基本的な存在様式である。では、知覚世界の「図」はどのようなもの「として」立ち現われているのであろうか。

知覚世界の「図」は、あるカテゴリー（カントの言う「カテゴリー」ではなく通常の意味での）のもとに立ち現われる。例えば、知覚世界には、多種多様な無数の異なる石があるが、い

ずれも「石」として立ち現われる。そして、「石」として立ち現われるということは、それが、「土」や「砂」や「岩」や「泥」とは異なる存在として立ち現われるということであると同時に、他に存在する無数の「石」と同じ存在として、言いかえると「石」というカテゴリーに属す個物の一つの例として立ち現われるということである。あるカテゴリーのもとに立ち現われるということは、それが唯一無二の存在ではないということである。カテゴリカルに立ち現われる知覚世界には、唯一無二の「図」は基本的には存在しない。「外的世界は、時間と空間のなかに分散している個々の独自の諸対象が、一定の仕方で配置されたものとして経験されるのではなく、「山」「木」「動物」「人びと」として経験される」(Schutz1973=1983:54)のである。

なお、カテゴリーのもとに立ち現われる知覚世界の「図」は、「石」や「山」や「動物」といった事物に限られるわけではない。人間を初めとする生物一般の行動・動き、事物の変化、様々な音などもカテゴリカルに立ち現われる。知覚世界では、「犬」が「威嚇し」、「少女」が「助けを求め」、「雪」や「アイスクリーム」が「溶け」、「車の急ブレーキ」や「聞いたことのない不気味な叫び声」が聞こえるのである。

さて、以上のように、知覚世界の「図」はカテゴリカルに立ち現われる(=あるカテゴリーに属す一つの例「として」立ち現われる)わけであるが、このカテゴリカルに立ち現われるということをさらに説明しよう。知覚世界の「図」があるカテゴリーのもとに立ち現われるということは、それが、「石」とか「木」とか「雪」とか「溶ける」とか「甲高い鳴き声」といった名称を持つものとして立ち現われるということであるが、それだけではない。例えば、それが、「アボガド」として立ち現われるということは、それが「アボガド」という名称を持つものとして立ち現われるということだけではなく、「中は緑がかったクリーム色をしているもの」として、「大きな種を持つもの」として、「皮がかたいもの」として、「寿司のネタになるもの」として、「メキシコ料理の食材」として、「スーパーで一個二百円くらいで買えるもの」として、「母親の好物」として、あるいは「熱帯アメリカ原産の亜熱帯性の常緑果樹の実」として立ち現われるということでもある。それが、「アボガド」として立ち現われるということは、このように様々なものとして立ち現われるということである。カテゴリカルに立ち現われている知覚世界の「図」は、多層的に有意義な存在なのである。

では、どのようにして、知覚世界の「図」は、カテゴリカルに立ち現われ、多層的に有意義な存在となっているのだろうか。

## (2) 経験的統一と志向的意識：カントとフッサールの意味付与論

カントの考え方に従えば、知覚世界の「図」が有意義なものになっているのは、経験的概念による経験的統一が行われているからである。『純粹理性批判』の中で、カントは、「我々にかかる経験的統一を、ここでは考慮に入れない」(Kant1787=1961a:183)と述べており、経験的統一については、限られた記述しか残していない。その限られた記述にもとづいて、経験的統一を説明すると次のようになる。まず、感性によって与えられた多様な表象を構想力が総合し、さらに、悟性がこの総合された表象を純粹悟性概念に従って統一する(前章参照)。そして、カントによれば、その都度与えられた経験的条件のもとで、この統一=先験的統一から経験的統一が具体的に導出される(Kant1787=1961a:183)。我々の理解によれば、これは、先験的に統一された現象にさらに経験的な概念が適用され、「犬」や「山」や「火事」といった

カテゴリーカルな現象が構成されるということである。ただし、経験的な概念がそのまま適用されるのではない。適用されるのは、経験的概念の図式 Schema である。経験的概念の図式とは、経験的概念が表象ないしは直観（正確には先験的に統一された現象）に適用される時の型、あるいは、カント自身の言によれば、「我々の直観を或る一般概念に従って規定する規則」（Kant1787=1961a : 218）である。そして、この図式は、「それ自体常に構想力の所産」（Kant 1787=1961a : 217）であるとされる。つまり、純粋悟性概念に従って先験的に統一された現象に、構想力が産み出した経験的概念の図式が適用されることによって、「犬」とか「山」とか「火事」といった現象が構成されるのである。カントは、「形像はこの図式によって、またこの図式に従って初めて可能になる」（Kant1787=1961a : 218）、あるいは「形像は産出的構想力の経験的能力による所産である」（Kant1787=1961a : 218）と述べているが、これは、「犬」とか「山」とか「火事」といったカテゴリーカルな現象は、構想力が産み出した経験的概念の図式の適用によって可能になるということである。経験的統一とは、先験的に統一された現象に、経験的概念の図式が適用されることによって、「形像」=カテゴリーカルな現象が構成されることである。

さて、以上のようなカントの考え方に関する我々の見解は後に述べることになるが、その前に、知覚世界の「図」の有意義的な構成を説明するもう一つの代表的な理説にふれておかなければならない。フッサールの「志向的体験としての意識」に関する理論がそれである。フッサールは、この理論で、意味を担った超越的な（意識体験に属さないという意味での）対象の構成を以下のように説明する。まず、フッサールによると、意識を超越した客観的存在という確信そのものは、意識の志向的働きによって支えられている。「志向性なしには、対象と世界は、われわれにとって現存しない」（Husserl1954=1995 : 292）。意識の志向的働きが超越的对象の意味と存在を構成するのである。では、この志向的働きを持った意識とはどのようなものだろうか。フッサールは、意識を志向的な体験であるとするが、この場合の「志向的」という言葉は、「意識とは何ものかについての意識であり、意識作用としてみずからの意識対象をそれ自身のうちに有しているという、意識のこの一般的な根本特性を意味するものにほかならない」（Husserl1929=1980 : 214）。そして、このような意味での志向的な意識は、ヒュレー的契機=感覚与件に何らかの統握の働きが加わって初めて成立するとされる。ヒュレー的契機は、色彩与件、触覚与件、音響与件等々からなるが、それ自身は、志向性を寸毫たりとも持っていない。この志向性を持たないヒュレー的契機を、ノエシスの契機が統握し生気づけることによって、志向的意識が成立するのである（Husserl1950=1984 : 92）。そして、志向的意識が成立することとは、とりもなおさず、超越的な対象が構成されるということに他ならない。ノエシスの契機は、素材としてのヒュレー的契機を統握し生気づける、すなわちヒュレー的契機に意味付与を行う。この意味付与によって、超越的な対象が構成されるのである。「素材的な諸体験の「基底の上に」、ノエシスの諸機能を「媒介にして」、「超越論的に構成されたもの」が成り立ってくる」（Husserl1950=1984 : 146）、あるいは、「感覚複合が生化されることによって、知覚された対象が現出する」（Husserl1922=1970 : 86）のである。なお、「感覚複合そのものは、知覚される対象を構成する作用と同様、現出はしない」（Husserl1922=1970 : 86）。すなわち、超越的な対象の構成において、ヒュレー的契機もそれに意味付与を行うノエシスの契機も現出することはない。また、ヒュレー的契機としての色、延長、強度と知覚的に現出する色、延長、強度は、まったく別物である（Husserl1922=1970 : 86 ; 1950=1984 : 92）。「後者はむ

しろ、前者の感覚諸内容を介して、「呈示」されてきて体験されるわけである」(Husserl1950=1984:92)。

ところで、フッサールは、志向的意識による超越的な対象の構成を、周知の「ノエマ」という用語を使っても説明している。その説明を以下に略述しよう。すでに記したように、志向的意識とは、「何ものかについての意識」、「意識作用としてみずからの意識対象をそれ自身のうちに有している」意識である。そして、これも既述のように、この志向的意識は、ヒュレー的契機をノエシ的契機が統握することによって成立する。すなわち、ノエシ的契機がヒュレー的契機に意味付与を行うことによって超越の対象を構成する事態は、言いかえると「何ものかについての意識」が成立する事態なのである。フッサール自身の言によると、「もろもろのノエシスが、素材的なものを生気づけながら、またたがいに組み合わせられて多様かつ統一的な連続と総合とになりながら、或るものについての意識を成立させ」るのである (Husserl1950=1984:98)。そして、「何ものかについての意識」としての志向的意識の志向的相関者、あるいはヒュレー的契機とノエシ的契機の実的統一の中で意識されるところのものがノエマの契機である。志向的体験としての意識は、実的(レエール)にはヒュレー的契機とノエシ的契機という構成要素を持ち、この実的構成要素が意識全体のノエシ的側面をなす。(正確には、ノエシ的契機のおかげで、意識はノエシ的体験となっている (Husserl1950=1984:106)。)ただ、意識は、ヒュレー及びノエシという実的構成要素だけで自己完結しているわけではない。意識は、実的構成要素=ノエシ的側面の志向的相関者として、ノエマの契機を持っている。ノエマ的契機は意識の実的な構成要素ではないが、意識に志向的に内在している。志向的体験としての意識は、実的な構成要素とそれの非実的な志向的相関者すなわちノエマの契機から成っているのである (Husserl1950=1984:106)。そして、後者のノエマの契機も前者と同様、複合的な諸契機からなっており、そのノエマ的諸契機の中でも核となっているのが、「意味」である (Husserl1950=1984:113)。フッサールによると、この意味が存立するには、それを担う「何か或るもの」がなければならない。(正確には、意味だけではなく存在様相、時間様相をも含めたノエマの契機の全体が存立するには、それを担う「何か或るもの」がなければならない。)この「何か或るもの」を、フッサールは、 $X$  = 「意味の必然的な中心、統一点、純然たる規定可能な  $X$ 」(Husserl1950=1984:262)と呼んでいる。ノエマの意味は、「知覚されたものそのもの」とも呼ばれ、それ自体が一種の「対象性」を持つものとみなされているが、それは、意味が常に対象自体としての対象  $X$  に担われた形で存立している、あるいは意味がその中に対象  $X$  を内蔵しているということである。フッサールは、志向的意識と対象との関係に関して、「いかなる志向的体験もみな、或るノエマを持ち、そのノエマにおいて或る意味を持ち、この意味を介して、その体験は、対象へと関係する」(Husserl1950=1984:271)と述べている。これは、志向的意識は、それに志向的に内在する意味を含んでいるが、その意味は対象自体=対象  $X$  に担われた形で存立している、すなわち志向的意識は、その志向的相関者として対象自体を内に含んでいるということである。「あらゆる意識作用、あらゆる意識体験は、何ものかを思念し、そしてそのつどみずからの意識対象を、思念されたものというしかたでそれ自身のうちに有している」(Husserl1929=1980:214)のである。フッサールは、超越を、意識の志向的相関者として、あるいは「志向的な内在性格として」(立松1977:39)捉え直したのである。

なお、フッサールが、「ノエシ的契機がヒュレー的契機に意味付与を行うことによって超

越的な対象が構成される」と言う場合の「対象」は、対象 X のことではない。フッサールは、二つの「対象」概念を区別している（Husserl1950=1984：260-261）。一つは、対象自体という意味での対象 X、もう一つは、「いかにあるかというありさまにおける対象」である。後者の対象は、ノエマ的諸契機（意味、存在様相、時間様相）を担った対象であり、それには「概念的に表現されうるすべてのものが纏い付いている」（Husserl1950=1984：261）。ノエシ的契機がヒュレー的契機に意味付与を行うことによって構成する対象とは、この後者の対象のことである。

また、対象 X が担うことになる意味は多層的である。対象は、常にノエマのもとに、従ってある意味を帯びて現われてくるが、この意味は多層的なのである。なぜなら、「或る具体的な体験の統一の中で、幾重にも、もろもろのノエシスが、相互に積み重ねられており、したがって、ノエマ的相関者も同じく、基づけられたものになっている」（Husserl1950=1984：126）からである。言いかえれば、ノエシ的契機がヒュレー的契機に施す意味付与は多層的なものであり、その結果として、多層的に有意味な対象が構成されているのである。

さて、以上にカントとフッサールの議論を要約したが、この二つを例えば「『感覚的与件プラス加工』というカント的・フッセル的な超越論的現象学」（大庭 1996：308）という表現のもとに括ってしまうことは、間違いなく乱暴だろう。カントの議論における先験的に統一された表象とフッサールの言うヒュレー的契機=感覚与件は概念的に異なるものであるし、経験的概念の図式の適用と統握作用=意味付与の作用を同一視することもできない。しかしながら、両者には、いまだ意味を帯びていない素材に外部からの作用ないしは加工が施されて有意味な事象が形成されるという共通の考え方（現象と超越的な対象とでは概念的な意味合いが違っても）が見出されることは否めない。そして、問題は、いまだ意味を帯びていない素材といったものを立てることが本当に妥当なのかということである。

例えば、ある哲学の入門書は、フッサールの議論を次のように（「あえてわかりやすく」という但し書きつきではあるが）説明する。「われわれが幾何学の証明を考えると、さしずめ紙の上に鉛筆で図形を描きながら考えるとすると、この紙の上の図形が感覚的素材（ヒュレー）であり、それをもとにわれわれが思考している幾何学的真理がノエマの意味であり、ノエマの意味をめざして思考している心的作用がノエシスである。」（田島 1998：37）この説明全体へのコメントは差し控えるが、紙の上の図形が感覚的素材=ヒュレー的契機であるというのは誤りだろう。図形は「図形」という意味を帯びてしまっているし、たとえ「図形」という意味を帯びていないにせよ、「紙の上の線」といった意味は帯びているからである。

いまだ意味を帯びていない素材に外部からの作用ないしは加工が施されるということを主張するには、いまだ意味を帯びていない素材が何らかの形で生起し得ることを示さなければならない。このことに関して、フッサールは、以下のように述べている。

白い紙の知覚体験において、もっと詳しく言えば、その紙の白さという性質に関係した知覚の構成要素のうちに、われわれは、適切に目差しを向け換えかつ純粋に心理的なものへと現象学的還元を施してゆけば、白という感覚与件を見出すであろう。（Husserl1950=1979：161）

ここで言う「白という感覚与件」は、ノエマの意味としての「紙の白」とは異なる。「白と

「この契機が知覚の中で、したがってその契機自身に付属する知覚の組成要素（≪対象の色彩現出≫）の中で≪統握≫され、客観化〔＝対象化〕される」（Husserl1922=1974：145）ことによってノエマ的意味としての「紙の白」が構成されるのである。そして、フッサールは、この客観化＝対象化以前の「白という感覚与件」を見出すことが可能だと言っているのである。フッサール自身、そのようなものを見出したと確信するような経験をしたのかもしれない。しかし、「白」という言葉で表現可能である限り、それは意味を帯びているのだと我々は考える。

どのように目をこらし、耳をこらしても、「意味を生きる」ことを中断するのは不可能である。聞こえているのは*Love Dance*だという意味を払いのけ、イヴァン・リンスの声だという意味を払いのけ、人間の声だという意味を払いのけ、CDプレイヤーの音だという意味を払いのけても、何かの音だという意味を払いのけることはできないだろう。我々は、フッサールの言う現象学的還元は究極的には不可能であると考え<sup>(2)</sup>。

なお、浅田彰は、ジャン＝リュック・ゴダールが、いまだ意味を帯びていない事象の生起を映像によって反復しようとしていると指摘している。浅田は次のように言う。

まずもって、われわれは物を「……として」認識することしか出来ない。かもめ「として」鳥を見、かもめの鳴き声「として」音を聞くことしか出来ない。にもかかわらず、その向こう、あるいはその手前に、「として」無しのものであり、とにかく礫のように映像が飛んでくる、礫のように音が飛んでくる、それにただ無媒介に打たれるという体験がありうるのであって、それをしかも映画という媒体を通して反復してみせるというのがゴダールの狙いなんですね。それを完全に実現することはもちろん不可能だけれど、映像と音をわざと分岐させ、分岐したまま衝突させることで、「として」の向こう、あるいは手前にある即物性みたいなものを、辛うじて一瞬出現させようとする。（松浦・浅田1997：115）

意味に汚染されていない事象を見出すことは不可能であるが、実際にそれは生起しており、それをスクリーンにおいて反復しようとするのが、ゴダールの試みであるということである。ただ、映像と音をわざと分岐させ、分岐したまま衝突させることで、即物性みたいなものを出現させたとしても、それは、いわゆるゴダール的な映像、音「として」立ち現われてしまうだろう。

また、意味に汚染されていない事象が見出せないかぎり、実際に、それが生起しているとは主張できないと我々は考える。そして、いまだ意味を帯びていない事象＝感覚与件が生起していないということになれば、先験的に統一された表象に経験的概念の図式が適用されるというカントの理論、及びヒューレ的契機＝素材がノエシスの契機によって意味を付与されるというフッサールの理論は、知覚世界の意味的立ち現われに関する説明としては有効ではないということになるだろう。知覚世界の「図」がどのようにして有意味なものになっているのかということに関しては、カントやフッサールの理論とは異なる説明が呈示されなければならない。我々は、その作業を以下に行いたい。

### (3) 知覚世界と言語

意識システムが産出する知覚的立ち現われは、感覚与件に相当するものではない。カントと

フッサールの用語を使えば、経験的に統一された現象、ないしは意味を担った超越的な対象がいきなり立ち現われるのである。意識システムは、「として」構造を持った有意味な世界を直に産出する。意識システムの産出作用の外に意味付与の作用があるのではない。意味に汚染されていない知覚的立ち現われと意味というものが別々に存在してそれらが結びつけられるのではないのである。では、意識システムが産出する知覚世界は、なぜ有意味な世界として立ち現われているのだろうか。端的に言えば、それは、知覚世界が言語と織り合わされて立ち現われているからである<sup>(3)</sup>。本節では、知覚世界が言語とどのように織り合わされ意味世界として成立しているのかをくわしく説明したい。まずは、その前史を概観しておこう。

意識システムの発生当初においては、意識システムが産出する知覚的立ち現われは言語と織り合わされてはいない。これは確かである。ただ、言語と織り合わされていないということは、知覚世界がまったく分節されていないということではない。ある論者は、言語を「茫漠としてかたちなく変化し常なき現実生起（存在）を分節し、実体的に象られた事物事象の世界（ $\beta$ 位相）を現出させるはたらきである」（古東1992：71）と定義している。言語をこのように定義するということは、言語的分節以前の分節を基本的に認めないということである。しかし、言語的分節以前の知覚世界は、本当に「茫漠としてかたちなく変化し常なき現実生起」なのであろうか。意識システム発生初期の知覚的立ち現われがどのようなものであるのかを正確に知ることは不可能である。ただし、最近の発達心理学や言語心理学による研究成果に従えば、乳児の知覚世界は言語習得以前にすでに分節されている。聴覚について言えば、乳児は出産直後から音声を聞き分ける能力を持っており、また早い時期から周囲の幅広い音声をカテゴリー化して認知していることがわかってきている（村上（京）1987：197）。視覚について言えば、生まれたての乳児は、強度の近視かつ乱視きみで、成人なみの明瞭さで物が見えるようになるには生後一年を待たなくてはならないと指摘されているが（Mehler & Dupoux1990=1997：96）、それ以前の時期においても目の前数十センチの世界はすでに分節されている（高橋1993：37）。また、生後六ヶ月以降になると分節された知覚世界の「凶」のカテゴリー化も行われるようになる。その代表的な例として挙げられるのは、母親の顔をはじめとする人間の顔のカテゴリー化である。乳児は、様々な角度で示された同一人物例えば母親の顔を、同じ人物の顔としてカテゴリー化したり、様々な女性の顔から女性一般というまとまりを抽出し、それを男性の顔とは違うものとしてカテゴリー化したりするようになる（高橋1993：46）。そして、さらに乳児が移動することが可能になると知覚世界は飛躍的に拡大し、知覚世界のカテゴリー化はさらに進展することになる。具体的には、見かけが少しずつ異なる様々な物、例えば、犬や馬などを、一つのカテゴリーにまとめるということが行われるようになる。このようなカテゴリー化の進展を前言語的な分類体系・概念体系の形成とみなす研究者もいる（無藤1994：209-232）。発達心理学や言語心理学による以上のような指摘に従えば、意識システム発生初期の知覚的立ち現われは決してのっぺらぼうな連続体ではなく、分節されているということになる。

また、人間にとっての現実が言語によって構成されていることを主張するラカン派の精神分析理論も、言語によって分節される以前の知覚世界が自ら差異を生み出すことによってすでに分節されていることを認めている。このことに関して、藤田博史は次のように書いている。

視覚はそれ自体で差異を生み出しうるものであり、言語シニフィアンに依存することのない視覚における差異、すなわち視覚シニフィアンというものを仮定する必要がある。視覚

シニフィアンに限らず、差異を生み出すことのできる知覚シニフィアンは言語シニフィアンの発生に関する鍵を握っており、決して言語シニフィアンによって一方的に恣意的分節を被っているのではない。(藤田1990:165)

ところで、発達心理学や言語心理学の研究成果によれば、乳児の知覚世界は言語習得以前の時期においてすでに分節されているだけでなく、さらに事物のカテゴリー化さえ行われているわけだが、意識システム論の観点からするとこのカテゴリー化は意識システムの自己言及的作動の所産であると考えることができる。この自己言及的作動によるカテゴリー化の過程は次のように図式化することができるだろう。まず、ある知覚内容 A1 が知覚的立ち現われ全体の中の「図」の一つとして産出され、ついで、その A1 に再帰的に相互作用する形で、同様の知覚内容 A2 が産出される。この時、A2 は A1 と同一性を持つものとして産出される。そして、さらに知覚内容 A3 が、A1、A2 と同一性を持つものとして産出される。このような産出作動の反復によって、結局、A というカテゴリーが形成され、知覚内容 A<sub>n</sub> は A というカテゴリーに属する一つの個別として産出されるようになるのである。そして、この段階において、「図」と「地」の境界は当初の境界に比べてより確固たるものとなるであろう。

さて、(1) で述べたように、知覚世界が意味世界として立ち現われるということは、知覚世界に内属する「図」が「何かあるものとして」立ち現われるということである。実際には、意味世界としての知覚世界の「図」は、まずあるカテゴリーのもとに「石」として、「机」として、「犬」として立ち現われる。このように知覚世界の「図」がカテゴリーカルに立ち現われることが意味世界としての知覚世界の基本的な存在様態である。そして、上記のように、知覚世界の「図」のカテゴリーカルな立ち現われは知覚世界が言語と織り合わされる以前にすでに進展してしまっている。カテゴリーに名称はないが、知覚世界の「図」は、言語以前の段階で、あるカテゴリーに属するもの「として」産出されるわけである。ということは、意識システムが産出する知覚世界は、言語と織り合わされる前の段階で、すでに意味世界として立ち現われているということであろうか。「として」構造を意味世界の基本的な存在様式とみなす立場から厳密に判断すればそうである。よって、言語と織り合わされることによって知覚世界は意味世界として構成されているという我々の立言には留保をつけなければならない。しかし、言語以前にカテゴリー化が進展するといっても、そのカテゴリーの数は限られている。例えば、色々な動物を包摂する大カテゴリーは存在するかもしれないが、それをさらに分類するカテゴリーは存在しない(無藤1994:213-218)。また、あるカテゴリーのもとに立ち現われる「図」が、先にアボガドの例で示したように様々なものとして立ち現われることもない。知覚世界が稠密に分節され複雑なカテゴリーのもとに多層的に有意義なものとして立ち現われるようになるには、やはり言語を待たなければならないのである。

発達心理学や言語心理学が教えるところによれば、乳児の知覚世界の言語的なカテゴリー化は、生後十ヶ月から十八ヶ月の間に訪れるとされる一語文の時期に始まり、その後のいわゆる「命名の爆発」の時期に急速に進展する。この言語的なカテゴリー化は、一般的な表現で言えば次のような形で進んでいく。まず、大人がある知覚内容、例えば縫いぐるみの犬を指しながら「ワンワン」と発話し、その後、乳児が同じ縫いぐるみを指しながら、あるいは大人が同じ縫いぐるみを指した時に、「ワンワン」と発話する。このような過程を通して、当の縫いぐるみと「ワンワン」という音声の間に隣接性が形成されていく。言いかえると、縫いぐるみが

「ワンワン」という音声と結びついたものとして存在するようになっていく。そして、さらに同じような過程を経て、絵本の中の犬や実物の犬が「ワンワン」という音声と結びついたものとして存在するようになっていく。その結果、「ワンワン」という音声と結びついたものというカテゴリー、すなわち「ワンワン」というカテゴリーが形成され、そのカテゴリーに属するものとして縫いぐるみの犬、絵本の中の犬、及び実物の犬が存在するようになっていくわけである。これは、言いかえると、縫いぐるみの犬が唯一無二の存在ではなく、絵本の中の犬や実物の犬と同じものとして存在するようになっていくということである。

なお、以上のようなカテゴリー化が可能なのは、次の前提条件が満たされているからである。まず第一に、視覚世界が分節されていること。もし、視覚世界が言語以前には分節されていないとするならば、それはそもそも「図」としての犬が存在しないということであるから、犬が「ワンワン」という音声と結びつくことはあり得ない。「子どもが意味のあるまとまりとして知覚できていないような対象を、ことばや指差しによって子どもに示しそれを理解させようとしても、おそらく無理」（麻生1992：322）なのである。そして、第二に、音声に分節されていること。音声に分節されていなければ、当然「ワンワン」という分節音も存在しない。よって、それが犬と結びつくこともあり得ない。このように視覚世界と音声に分節されていることが、言語的なカテゴリー化の前提条件であり、実際にそれは満たされているのである。このことから、どこにも境界線のない茫漠とした知覚世界を言語が初めて分節していくのだという考え方が誤りであることがわかるだろう。

では、言語的なカテゴリー化は言語以前のカテゴリーにどのように関わっていくのだろうか。言語的なカテゴリー化は、言語以前のカテゴリーとはまったく無関係な新しいカテゴリーの形成である場合もあるが、言語以前のカテゴリーの再構成をもたらす場合もある。具体的に説明しよう。先に挙げた例では、知覚世界の「図」としての様々な犬と「ワンワン」という音声の間に隣接性が形成されていくことによって、「ワンワン」というカテゴリーが作られていった。ただ、この「図」としての犬はすでにある前言語的なカテゴリーのもとに立ち現われている場合もあるだろう。例えば、犬が、四つん這いで歩く動物一般を包摂するカテゴリーに属するものとして立ち現われている場合もあるだろう。このような場合、犬と「ワンワン」という音声と結びついていくということは、実は、すでに存在するカテゴリー、すなわち四つん這いで歩く動物一般を包摂するカテゴリーに、「ワンワン」という名称がつけられていくということである。ある言語心理学者の観察によれば、一歳半ばの乳児は、テレビに写ったあざらしを見て「ワンワン」と言ったり、熊の人形を見て「ワンワン」と言ったりする（藤友1987：22-23）。また、よく見かける例として、乳児が自分の父親以外の男子を「お父さん」と呼んだりする。これらは、四つん這いで歩く動物一般を包摂するカテゴリー、及び男子一般を包摂するカテゴリーにそれぞれ「ワンワン」、「お父さん」という音声と結びつけられた例である。大人は、犬と「ワンワン」、父親と「お父さん」を結びつけようとするわけだが、以上のような前言語的なカテゴリーが存在する場合には、そのような試みは、犬や父親以外の「図」をも包摂する前言語的なカテゴリーへの名付けという結果を招くのである。ただし、言語的なカテゴリー化は、前言語的なカテゴリーへの名付けという形で終わってしまうわけではもちろんない。その後、あざらしには「あざらし」という音声と、熊には「熊」という音声と、父親以外の男子には例えば「隣のお兄さん」という音声と結びつけられていく。その結果、前言語的なカテゴリーは、細分化もしくは解体されていくことになる。犬とあざらしはそれぞれ「犬」と「あざらし」と

いう別々のカテゴリーに属するものとして立ち現われるようになり、第一義的には四つん這いで歩く動物一般というカテゴリーのもとには立ち現われなくなる。このようにして言語的なカテゴリーの形成は、前言語的なカテゴリーの再構成をもたらすのである。

なお、丸山圭三郎が自らの経験として紹介している次のようなエピソードも、前言語的なカテゴリーと言語的なカテゴリーの関係に関する興味深い事例とみなすことができる。

走っている電車の中だった。がらがらの座席に母親とともに坐っていた三歳ぐらいの女の子が、「デンシャ、デンシャ」と習いたての単語を一生懸命口の中でつぶやいては、周囲の窓枠や席の布地を手でさすったあげく、思いあぐねた様子で母親にこうたずねたのである。「ママ、デンシャって人間？それともお人形？」(丸山1985:154)

丸山の解釈によれば、この女の子は「デンシャ」という語を知る前には、世界を「動くもの、そして柔らかく温い感触をもつもの」というカテゴリーと「動かないもの、そして固く冷たい感触をもつもの」というカテゴリーによって分節していた。そして、人間は前者のカテゴリーに属し、人形は後者のカテゴリーに属していた(丸山1985:154-155)。ところが、「動くけれども、固く冷たい感触をもつもの」=電車に接して、これまでのカテゴリーでは分類できなくなっているというわけである。我々は、この例を次のように解釈する。この女の子は、丸山が言うようなカテゴリーを前言語的なカテゴリーとして持っていた。そして、前者のカテゴリーには人間が属し、後者のカテゴリーには人形が属していた。ただ、大人が、人間と「人間」という音声、人形と「お人形」という音声を隣接させた際に、「人間」という音声人間を包摂する前者のカテゴリーに、「お人形」という音声人形を包摂する後者のカテゴリーに結びつけられてしまったのである。この女の子にとって、「人間」は「動くもの、そして柔らかく温い感触をもつもの」というカテゴリーの名称であり、「お人形」は「動かないもの、そして固く冷たい感触をもつもの」というカテゴリーの名称なのである。しかし、これらのカテゴリーは、やがて言語的なカテゴリー化が進展するにつれて解体したであろう。女の子の母親はこの時、「バカねえ、電車は電車よ」と答えているが(丸山1985:156)、その後の日常生活において、「人間」と「お人形」に属する様々な「図」を、他の音声に隣接させていったはずである。その結果、「人間」と「お人形」は上記のようなカテゴリーの名称ではなくなり、また、上記のようなカテゴリーのもとに知覚世界の「図」が立ち現われることもなくなったはずである。女の子の「人間」と「お人形」の例は、前言語的なカテゴリーが言語的なカテゴリー化の進展によって解体していく途中の段階の例なのである。

ところで、ここまでの説明では、顔、犬、動物といった事物のカテゴリーの例しか挙げてこなかったが、カテゴリー的に立ち現われるのは、何も事物だけではない。事物以外にも事物の性状、事物の変化、人間や生物の行動・動き、運動・変化の結果としての事態、事態の性状といった知覚世界の「図」もあるカテゴリーのもとに立ち現われる。これらの「図」の前言語的なカテゴリーに関しては、取り立てて研究成果もなく、ここで立ち入ることはできないが、これらの言語的なカテゴリーが形成されていることは間違いない。言語心理学者の観察によれば、乳児は、最初、食物、飲み物、動物、乗り物などに関する名詞を獲得し、ついで動詞、形容詞、副詞、接続詞などを獲得していく。獲得された語彙の内、名詞は五十%前後を占め、動詞は二十%前後で、残りは形容詞または副詞の順になっており、この割合は乳幼児期全体を通して一

定している（野田1981：128）。そして、五十%前後を占める名詞以外の語彙が先ほどの「囟」と隣接させられることによって、それらのカテゴリーが形成されていくのである。具体的に言えば、例えば、雪の水への変化、フライパンの上でのバターの変化、口の中でのキャンディーの変化等に、「溶ける」という言葉が隣接させられることによって、それらは、「溶ける」という変化のカテゴリーに属するものとして立ち現われるようになる。口の中でのキャンディーの変化がフライパンの上でのバターの変化と同じものとして立ち現われるようになるのである。また、同じような過程を経て、池の上でのアヒルの動きも水中での魚の動きもプールでの人間の動きも、ともに「泳ぐ」というカテゴリーのもとに立ち現われるようになるのである。

なお、フロイトによって考察された彼の孫の糸巻き遊びの例は、初期の言語習得の事例として有名であるが、この例は、「いる」、「いない」という事態のカテゴリーの形成過程をめぐる例と考えることができる。順を追って説明しよう。糸巻き遊びとは、生後十八ヶ月のフロイトの孫が自分で見つけた遊戯である。この遊戯を直接観察したフロイトによると、「心から母親になついていた」この男の子は、ひもを巻きつけた木製の糸巻きを自分のベッドの中にへりごしに投げ込み、その糸巻きが見えなくなると、今度はひもを引っぱってそれを取り出すという遊戯を飽きることなくくり返していた。この糸巻き遊びは、「不在と再現をあらわす遊戯」であり、糸巻きが見えなくなると、男の子は、オーオーオーオ（fort「いない」）と声を出し、糸巻きが出てくると、da「あった」の言葉で迎えた。そして、その内、男の子は、糸巻きを投げ込む「不在」の行為だけをくり返すようになった。フロイトはこの遊戯を、「母親が立ち去るのを、さからわずにゆるすという欲動放棄を子どもがなしとげたこと」の証左とみなす（Freud1920=1970：14）。男の子は、母親の不在と再出現を糸巻きのそれに置きかえている。つまり、彼は、自分の手もとにあるもので、母親との別れと再会を上演し、それで、母への欲望の断ち切り（欲動放棄）をつぐなったのである。そして、さらに、この遊戯においては、母の不在と現前が、fort - da という音の対によっても置きかえられている。ラカン及びラカン派の研究者によれば、この糸巻き遊びは男の子が象徴界すなわちシニフィアンとの連鎖の中に入って行く現場なのであり（Lacan1966：46, 575）、「この音素の対立遊戯の中で、この子供は現前と不在という現象を象徴的平面にまで引き上げ、それによって彼は言語の中に生まれたのである」（Benvenuto & Kennedy1986：89）。

糸巻き遊びを言語世界への参入の現場とみなすラカン及びラカン派の見解をここでくわしく検討する余裕はないが、我々は、この男の子は糸巻き遊び以前の段階で、すでに fort と da という言葉を獲得していたと考える。なぜならこの遊戯において、母親が見えるという事態と糸巻きが見えるという事態、そして母親が見えなくなったという事態と糸巻きが見えなくなったという事態がすでに同一のカテゴリーに属する事態とみなされているからである。フロイトが言うように、この糸巻き遊びが母親との別れと再会の上演であるとするならば、それは、糸巻きが見えるという事態が母親が見えるという事態と同じ事態として立ち現われ、糸巻きが見えなくなったという事態が母親が見えなくなったという事態と同じ事態として立ち現われているということである。では、なぜ、そのような立ち現われが産出されているのかというと、それは、これらの事態が、fort と da という音声と結びつけられたからである。fort という言葉と隣接させられたことによって、母親が見えなくなった事態及び糸巻きが見えなくなった事態がともに「いない」という事態のカテゴリーのもとに立ち現われ、da という言葉に隣接させられたことによって、母親が見える事態及び糸巻きが見える事態がともに「いる」という事態の

カテゴリーのもとに立ち現われるようになったのである。男の子が fort と da という言葉を発したのは糸巻き遊びの時から初めてだったかもしれないが、fort と da による「いない」、「いる」というカテゴリーの形成はそれ以前になされていたのである。

人間・生物・事物の行動や動きの結果としての事態も言葉と隣接されることによってカテゴリー的に立ち現われるようになる。すなわち、事態のカテゴリーが形成され個々の事態がそのカテゴリーのもとに立ち現われるようになる。そして、フロイトが報告している男の子の例は、事態の最初の言語的なカテゴリーとして「いない」、「いる」というカテゴリーが形成された例、及び生後十八ヶ月（あるいはそれ以前）の時点において事態のカテゴリー的な立ち現われが産出されるようになった例とみなすことができるのである。

それではここで、以上に述べてきた言語的なカテゴリーの形成過程を意識システム論の観点から説明し直しておこう。意識システム論の観点からすると、言語的なカテゴリーの形成においてもっとも重要な契機となるのが意識システムの自己言及的作動である。前言語的なカテゴリーの場合と同様、言語的なカテゴリーも意識システムの自己言及的作動の所産なのである。「魚」というカテゴリーの例で説明すると次のようになる。まず知覚世界の「図」として例えば皿の上の鮭の切り身が立ち現われる。ついで、その鮭の切り身を指し示す他者の身振りが立ち現われ、その身振りとともに「お魚」という音声も立ち現われる。そして、こうした一連の知覚的立ち現われが何度かくり返されることによって、「お魚」という音声も立ち現われていない時でも、皿の上の鮭の切り身は「お魚」という音声と結びついたものとして立ち現われるようになる。これは、意識システムが、「お魚」という音声と同時に立ち現われた過去の鮭の切り身に再帰的に相互作用する形で、鮭の切り身の知覚的立ち現われを産出するからである。（このような自己言及的作動がなければ、「魚」というカテゴリーは形成されないだろう。）そして、同様の過程を経て、鱈の開き、ちりめんじゃこ、絵本の中の鯛、水槽の中のエンゼルフィッシュ等も「お魚」という音声と結びついたものとして立ち現われるようになっていく。その結果、鮭の切り身、鱈の開き、ちりめんじゃこ、絵本の中の鯛、水槽の中のエンゼルフィッシュといった異なる知覚世界の「図」が、ともに「お魚」という音声と結びついたものとして、すなわち同じ「お魚」というカテゴリーに属するものとして産出されるようになるのである。なお補足すると、鯛やエンゼルフィッシュが「お魚」という音声と結びついたものとして立ち現われるようになるということは、それらが「お魚」という音声と同時に立ち現われた過去の鯛やエンゼルフィッシュに再帰的に相互作用する形で立ち現われるということであると同時に、すでに「お魚」という音声と結びついている鮭や鱈とも相互作用する形で立ち現われるということでもある。また、鮭や鱈と相互作用する形で立ち現われるということは、それらと同一性を持つものとして立ち現われるということである。そして、このような立ち現われは、意識システムの自己言及的作動によって可能になっているのである。

さて、知覚世界の「図」はあるカテゴリーのもとに立ち現われるようになって、有意な存在となるわけだが、知覚世界の「図」があるカテゴリーのもとに立ち現われるということは、単に、それが唯一無二の存在ではなく、また「ワンワン」とか「お魚」といった名称を持つものとして立ち現われるというだけのことではない。知覚世界の「図」がカテゴリー的に立ち現われるようになった次の段階として、それぞれのカテゴリーに様々な知識が結びつけられていき、知覚世界の「図」はその知識と織り合わされて立ち現われるようになる。これも順を追って説明しよう。

すでに述べたように、知覚世界の言語的なカテゴリー化は、事物に「ワンワン」や「お人形」といった音声で隣接させられることから始まるが、これは、観点を変わると「ワンワン」や「お人形」といった音声に、事物が隣接させられるということである。すなわち、意識システムの発生当初からすでに分節されている音声、とりわけ他者が発する音声が、次々と事物と隣接させられていくわけである。その結果、それらの音声が、特定の事物と結びついたものとして、あるいは特定の事物と置きかえられるものとして立ち現われるようになる。意味を持った名詞が立ち現われるようになるわけである。そしてさらに、その他の音声に、事物の性状、事物の変化、人間や生物の行動・動き、運動・変化の結果としての事態、事態の性状といった知覚世界の「図」が結びつけられていき、名詞について意味を持った動詞、形容詞、副詞等が立ち現われるようになっていく。他者が発する音声が意味を持ったいわゆる言葉として立ち現われるようになるわけである。

ところで、名詞だけが立ち現われている段階では、「ワンワンいない」といった文の立ち現われはないが、動詞、形容詞、副詞等が立ち現われる段階以降においては、意味を担った文及び言説、すなわち知覚世界の記述としての文及び言説が立ち現われるようになる。この文及び言説の記述内容はそれぞれ様々であるが、その中には、知覚世界の「図」のカテゴリーに関する知識と呼ばれるべきものが含まれている。わかりやすい例で言えば、「チーターは走るのが早い」、「バッタは草を食べる」といった例がそれに該当する。そして、こうした文が「チーター」、「バッタ」というカテゴリーと結びつけられ、知覚世界の「図」であるチーターは「走るのが早い動物」として、バッタは「草を食べる昆虫」として立ち現われるようになるのである。また、通常一つのカテゴリーには様々な文、言説が結びつけられており、それに応じて知覚世界の「図」は様々なものとして、すなわち多層的に有意義なものとして立ち現われる。

意識システム論の観点からすると、言語的なカテゴリーと様々な知識＝文及び言説との結びつきも、意識システムの自己言及的作動による。バッタの例で説明しよう。「バッタは草を食べる」という文が立ち現われると、その後、意識システムの自己言及的作動によって、「バッタ」という言葉は、「バッタは草を食べる」という文と結びついたものとして立ち現われるようになる。「バッタ」という言葉が、「バッタは草を食べる」という文に再帰的に相互作用する形で立ち現われるようになるわけである。そして、これは、「バッタ」というカテゴリーが「バッタは草を食べる」という文と結びついたということでもある。意識システムの自己言及的作動によって、「バッタ」というカテゴリーに「バッタは草を食べる」という文が結びつけられるわけである。そして、この結びつき以後、知覚世界の「図」であるバッタは、「草を食べる昆虫」として立ち現われるようになっていくのである。

なお、バッタが「草を食べる昆虫」として立ち現われるということは、バッタの知覚的立ち現われに伴って「バッタは草を食べる」という文が思い浮かぶということではない。そのような文が思い浮かばなくてもバッタは「草を食べる昆虫」として立ち現われる。他の例で言えば、「コブラは猛毒を持っている」という文が思い浮かばなくてもコブラは「猛毒を持った蛇」として立ち現われる。知覚世界の「図」が「～～」として立ち現われるということは、「～～」に相当する文や言説が思的に立ち現われるということではない。「～～」が思い浮かばなくても知覚世界の「図」は「～～」として立ち現われるのである。このことに関して、ハイデガーは次のように述べている。

《として》は言明のなかではじめて出現するものではなく、そこではじめて明言されるにすぎない。この明言がおこなわれうるのも、その《として》が、すでに明言可能なものとしてそこに控えているからである。端的に見やることのなかに言明の表明性が欠けていることがあるとしても、この端的に見ることに、いかなる分節の解意もなく、したがって《として》の構造がないなどと断定してよいということにはならない。(Heidegger1927=1994 : 323)

また、知覚世界の「図」が新たに「～～」として立ち現われるようになってもその「図」の形状や相貌は変化しない。例えば、それまで「毒を持った魚」として立ち現われていたふぐが、さらに「食べるとおいしい魚」として立ち現われるようになってもふぐの形状や相貌は変化しない。ふぐはこれまでとは異なる存在として立ち現われるようになるが、ふぐの外見や相貌は変化しないのである。知覚世界の「図」の意味的な立ち現われ方の変化は、「図」の形状や相貌とは異なる次元の変化である。これは言い換えれば、たとえその形状や相貌がまったく変化しなくても知覚世界の「図」はそれまでとは異なる存在として立ち現われるようになり得るということである。

さて、知覚世界の「図」のカテゴリーには様々な文や言説が結びつけられ、それに応じて当の「図」は多層的に有意味なものとして立ち現われるようになるわけだが、「図」のカテゴリーに結びつけられる文や言説は、現象学的社会学が、「手持ちの知識」あるいは「常識的知識」と呼んでいるものに重なる。シュッツやバーガー&ルックマンらの現象学的社会学は、人々が日常世界に関して持っている了解内容についての理論的考察を展開してきた。彼らが、考察してきた日常世界に関する人々の了解内容＝「手持ちの知識」、「常識的知識」は、我々の枠組みでは知覚世界の「図」のカテゴリーに結びつけられる文や言説に相当する。ただし、現象学的社会学は、「手持ちの知識」、「常識的知識」に我々の枠組みとはまったく異なる役割を与えている。例えば、シュッツによると、「日常生活における人間は、自分の過去および現在の諸経験の解釈図式として自分に役立ち、しかもこれから起こることについての自分の予想をも規定しているひとつの利用可能な知識の集積を、いかなる所与のときにも見出す」(Schutz1976=1991 : 377)。すなわち現象学的社会学では、件の「知識」を経験や出来事を理解するにあたっての解釈図式とみなす、言いかえると認識主体が裸の経験や出来事に意味を付与するにあたっての典拠とみなすのである。このような考え方が我々の枠組みと相容れないことは言うまでもないだろう。我々の枠組みでは、件の「知識」は、認識主体が経験や出来事を理解するための道具として持っているといったものではなく、意識システムの自己言及的作動によって、知覚世界の「図」のカテゴリーに結びつけられるものである。

それでは、ここまでの説明の要点をまとめよう。意識システムが産出する知覚世界が多層的に有意味な世界として立ち現われるのは、それが言語と織り合わされ、多層的に「～～として」立ち現われるからである。言語と織り合わされているということは、まず、知覚世界の「図」が、意識システムの自己言及的作動によって特定の言葉と結びつけられ、言語的なカテゴリーのもとに立ち現われるということである。(なお、知覚世界の「図」が言語的なカテゴリーのもとに立ち現われるようになっていくことによって、それ以前の非言語的なカテゴリーは、細分化もしくは解体していくことになる。)そして、言語的なカテゴリーには、これも意識システムの自己言及的作動によって、様々な文、言説＝知識が結びつけられており、知覚世界の

「図」は、この文、言説＝知識によって様々に説明されたものとしても立ち現われる。意識システムが産出する知覚世界が言語と織り合わされているということは、知覚世界の「図」が言語的なカテゴリーのもとに立ち現われるということであると同時に、言語的なカテゴリーに結びつけられた様々な文、言説＝知識によって説明されたものとしても立ち現われるということである。そのようにして、知覚世界は、多層的に有意味な世界となっているのである。

なお、知覚世界と織り合わされる言語は、意識システムの外部から導入されるわけではない。言語も意識システムが産出する知覚的立ち現われ（音声、文字）である。知覚世界が言語と織り合わされていく過程は、意識システムの内部だけで進行する過程である。つまり、意識システムは自らの作動によって自らの構成素を有意味なものにしていくのである。

## 註

- (1) もちろん本論文による補完だけで我々の意識システム論が十全なものになるわけではない。我々は今後もさらなる補完と修正作業を進めていく予定である。
- (2) 大森荘蔵も同じような指摘を行っている（大森1980：83-90）。
- (3) なお、意識システム論の枠内においては、黒崎宏も世界が「言語と織り合わされてそこに在る」ことによって〈意味の世界〉として構成されていることを指摘している（黒崎1997：98）。

## 文献

- 有福孝岳 1990『カントの超越論的主体性の哲学』理想社  
麻生 武 1992『身ぶりからことばへ』新曜社  
Benvenuto, B. & Kennedy, R. 1986 *The Works of Jacques Lacan: An Introduction*, Free Association Books.  
Freud, S. 1920 *Jenseits des Lustprinzips*, Internationaler Psychoanalytischer Verlag. =1970 井村恒郎訳「快感原則の彼岸」『フロイド選集 第4巻』日本教文社  
藤田博史 1990『精神病の構造』青土社  
藤友雄暉 1987「幼児の語彙」福沢周亮編『子どもの言語心理② 幼児のことば』大日本図書  
Heidegger, M. 1927 *Sein und Zeit*, Max Niemeyer. =1994 細谷貞雄訳『存在と時間』(上) 筑摩書房  
Husserl, E. 1922 *Logische Untersuchungen*, Max Niemeyer. =1970 立松・松井・赤松訳『論理学研究2』みすず書房=1974 立松・松井訳『論理学研究3』みすず書房  
Husserl, E. 1929 *Cartesianische Meditationen*. =1980 船橋弘訳「デカルト的省察」『世界の名著62 プレンターノ／フッサール』中央公論社  
Husserl, E. 1950 *Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie*, Erstes Buch, Martinus Nijhoff. =1979 渡辺二郎訳『イデーニ I - I』みすず書房=1984 渡辺二郎訳『イデーニ I - II』みすず書房  
Husserl, E. 1954 *Die Krisis der europäischen Wissenschaften und die transzendente Phänomenologie*, Martinus Nijhoff. =1995 細谷恒夫・木田元訳『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』中央公論社  
Kant, I. 1783 *Prolegomena zu einer jeden künftigen Metaphysik, die als Wissenschaft wird auftreten können*. =1977 篠田英雄訳『プロレゴメナ』岩波書店  
Kant, I. 1787 *Kritik der reinen Vernunft*. =1961 a 篠田英雄訳『純粋理性批判』(上) 岩波書店 =1961 b 篠田英雄訳『純粋理性批判』(中) 岩波書店  
河本英夫 1994「精神のオートポイエーシス」『imago』2月臨時増刊号

- 河本英夫 1995『オートポイエーシス：第三世代システム』青土社
- 古東哲明 1992『〈在る〉ことの不思議』勁草書房
- 黒崎 宏 1997『言語ゲーム一元論』勁草書房
- Lacan, J. 1966 *Écrits, Seuil.*
- 丸山圭三郎 1985『欲望のウロボロス』勁草書房
- 松浦寿輝・浅田彰 1997「ゴダールの肖像」『批評空間』II-13
- Mehler, J. & Dupoux, E. 1990 *Naitre humain*, Odile Jacob. =1997 加藤晴久・増茂和男訳『赤ちゃんは知っている』藤原書店
- 村上京子 1987「日本における子どもの言語心理研究の動向」福沢周亮編『子どもの言語心理② 幼児のことば』大日本図書
- 村上直樹 1997「心的システム論（上）：意識と無意識のオートポイエーシス」『人文論叢』第14号
- 村上直樹 1999「行為のオートポイエーシス：主体なき行為論の試み」『人文論叢』第16号
- 無藤 隆 1994『赤ん坊から見た世界：言語以前の光景』講談社
- 中島義道 1987「時間構成と自我構成」『思想』6月号
- 野田雅子 1981『乳幼児のことば』大日本図書
- 大庭 健 1996「自己が—自分のもの—を持つ、ということ」『廣松渉を読む』情況出版
- 大森荘蔵 1980「分析哲学と現象学」木田・滝浦・立松・新田編『講座・現象学④ 現象学と人間諸科学』弘文堂
- 大森荘蔵・野家啓一 1986「〈時〉の流れ・〈私〉の持続」別冊文藝編集部編『現代思想の饗宴』河出書房新社
- 大澤真幸 1995「メディアの共同体」『情況』4月号
- Schutz, A. 1973 *Collected Papers I*, Martinus Nijhoff. =1983 渡辺・那須・西原訳『社会的現実の問題 [I]』マルジュ社=1985 渡辺・那須・西原訳『社会的現実の問題 [II]』マルジュ社
- Schutz, A. 1976 *Collected Papers II*, Martinus Nijhoff. =1991 渡辺・那須・西原訳『社会理論の研究』マルジュ社
- 田島正樹 1998『哲学史のよみ方』筑摩書房
- 高橋道子 1993「家族の中で（0～2歳）」高橋・藤崎・仲・野田『子どもの発達心理学』新曜社
- 種村完司 1986「認識と意識」岩佐・尾関・島崎・高田・種村『哲学のリアリティ』有斐閣
- 立松弘孝 1977「フッセル現象学における意識と存在の問題」哲学会編『哲学雑誌：意識について』第92巻、第764号